

令和 6 年 9 月 16 日現在

機関番号：25406

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00377

研究課題名（和文）ヴィクトリア朝期の写真術と文学とラファエル前派主義芸術の関係性に関する研究

研究課題名（英文）A study on the relationship between photography and Pre-Raphaelite Art during the Victorian era

研究代表者

吉本 和弘 (Yoshimoto, Kazuhiro)

県立広島大学・地域創生学部・教授

研究者番号：90210773

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀中盤に発明された写真術は新しいメディアとして人々の視覚的認識に大きな影響を与えた。この影響について、同じ頃英国に出現したラファエル前派の絵画との比較や、それを取り巻く文学や美術批評の状況を検証することによってその意義を探ることが本研究の目的である。具体的にはO. G. レイランダー、ルイス・キャロル、ジュリア・マーガレット・キャメロン、レディ・クレメンティーナ・ヘイワースなどの写真作品と、ラファエル前派の画家ジョン・エヴェレット・ミレイやダンテ・ガブリエル・ロセッティらの絵画の分析、ジョン・ラスキンの美術理論などを通して、写真と絵画の相互影響関係について考察する論文を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

写真というメディアの使用形態が大きく変化している現代において、写真というものが我々の認識に与える影響の大きさを再認識することは重要な課題と言える。もはや写真はいつでもどこでも、ほぼ無限に撮影、複製可能となり、瞬時に世界に拡散する。またAIの進歩により、写真は容易に捏造することも可能だ。

この状況にあって、写真が人間にとってどのような意味を持ったのか、写真が出現した時代の状況を振り返ってみることは大きな意義があるだろう。本研究の成果は19世紀の英国で写真と絵画がどのようなせめぎ合いを見せたのかを確認することで、写真に対して我々がどう向かい合うのかを考えてもらう機会となるであろう。

研究成果の概要（英文）： Photography, invented in the mid-19th century, was an entirely new medium that greatly influenced people's visual perception. The purpose of this research is to examine this influence by comparing it with the paintings of the Pre-Raphaelite Brotherhood, which appeared in the British art world during the Victorian era, and by examining the surrounding literary trend and art criticism.

Specifically, I analyzed the photographic works of O. G. Rejlander, Lewis Carroll, Julia Margaret Cameron, and Lady Clementina Hawarden, as well as paintings by Pre-Raphaelite painters, such as John Everett Millais, Dante Gabriel Rossetti and some others. I have published several papers on the photographs by above mentioned photographers in terms of the influence they had from Pre-Raphaelite paintings or literary trend at that time.

研究分野：英文学・英文化研究

キーワード：写真術の出現 ラファエル前派絵画 ルイス・キャロル ジュリア・マーガレット・キャメロン レディ・クレメンティーナ・ヘイワース ヴィクトリア朝英国

1. 研究開始当初の背景

2018年に採択された本研究は、ヴィクトリア朝中期に写真というメディアが発明され一般への普及が始まった時代に、写真という全く新しい視覚メディアが人間の現実認識や芸術表現にどのような革命的な変化を与えたのかという問題について、当時のヴィクトリア朝イギリスの芸術運動であるラファエル前派の絵画と写真の影響関係を軸に、絵画が描く文学的テーマのことも念頭におきながら検討しようとするものである。写真と絵画、そして文学の関係性については、イギリスでは1990年代後半からいくつかの研究書が出版され、2000年以降はこのテーマに関係する展覧会(2010年のThe Pre-Raphaelite Lens: British Photography and Painting, 1848-1875. National Gallery of Art in Washington)なども開催され盛り上がりを見せていた。本研究開始時前の主な研究書としては、

Clayton, Owen, *Literature and Photography in Transition, 1850-1915*. Palgrave Macmillan, 2015.

Davidson, Kathleen, *Photography, Natural History and the Nineteenth-Century Museum: Exchanging Views of Empire*, Routledge, 2017.

Green-Lewis, Jennifer. *Victorian Photography, Literature, and the Invention of Modern Memory*. Bloomsbury, 2017.

などがあった。

しかし日本では、このテーマに関わるまとまった議論がほとんどみられない状況にあった。それは写真、絵画、文学という複数の領域に跨ったテーマであることや、初期の写真の普及が起こったイギリスとフランスの状況を、日本において把握することが資料調査の面からも困難であることによると思われる。

そこで本研究では、写真誕生直後のイギリスの写真家たち(O. G. レイランダー、ルイス・キャロル、ジュリア・マーガレット・キャメロン、レディ・クレメンティーナ・ヘイワードなど)の作品の作風の研究や、1848年に結成された若い画家による集団、ラファエル前派兄弟団(Pre-Raphaelite Brotherhood)の画家たち(ジョン・エヴェレット・ミレイ、ダンテ・ガブリエル・ロセッティ、エドワード・バーン＝ジョーンズなど)の作品における写真からの影響、ラファエル前派の画家の理論的支えとなった美術評論家ジョン・ラスキンの美術理論やそのテーマを多く供給した桂冠詩人アルフレッド・テニソンの作品や、当時の画家や写真家たち、そして文学者との関係性を示す文献資料などを研究することで、視覚メディアにおける革命がもたらした影響について検証し、その現代的意味合いを明らかにしようとした。

本研究課題の前の課題として、アーサー・マンビーの写真コレクションにおける19世紀の女性労働者の表象についての研究を行い、その成果を単著として出版した(『美しき汚れ：アーサー・マンビーとヴィクトリア朝期女性労働者の表象』2015年、春風社刊)が、本研究はその後続の研究として、より多くの写真家や画家を取り上げ、視覚メディアにおける大きな変化についてより総合的な研究となることを目指した。

2. 研究の目的

19世紀中盤に発明された写真術は、全く新しいメディアとして人々の視覚的認識に大きな影響を与えた。この影響についてヴィクトリア朝期の英国の美術界に出現したラファエル前派の絵画との比較や、それを取り巻く文学や美術批評の状況を検証することにより考察し、現代の視覚メディアの変化への対応の一助とするのが本研究の目的である。

写真というメディアの形態は今日加速度的に変化し続けている。その中で写真というものが我々の認識に与える影響の大きさを再認識することは重要な課題と言える。もはや写真は一昔前の、いわば模様のついた印画紙という物体ではなくなり、デジタル情報としてディスプレイ上に表示される画像情報となり、いつでもどこでも、ほぼ無限に撮影、複製可能となり、さらには加工されて、瞬時に世界に拡散し共有されることもできる状況にある。またAIの進歩により、写真は容易に捏造することも可能となり、本来持っていた現実の正確な写しまたは記録という意味合いも変わりつつある。

この状況にあって、写真が、その出現した時代に人間にとってどのような意味を持ち、その現実認識や芸術表現にいかなる影響を与えたのか、当該時代の状況を振り返ってみることは大きな意義があるだろう。19世紀の英国で写真と絵画、そして文学がどのようなせめぎ合いを見せたのかを確認し考察することによって、メディアの進歩による人間の認識の変化の歴史を理解することができるはずである。そしてそれが、現代において写真や、あるいはさらに新しく出現してくる視覚的メディアに対して、我々がどう向かい合うことができるのかを考える上で良い機会となるであろう。

3. 研究の方法

写真術の黎明期である 19 世紀中頃の代表的な写真家として現在高い評価を受けている O. G. レイランダー、ルイス・キャロル、ジュリア・マーガレット・キャメロン、レディ・クレメンティーナ・ヘイワードを中心とする写真家の作品の実物と、ラファエル前派の絵画作品群をできるだけ所蔵施設（ヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアム、ナショナル・ポートレート・ギャラリー、メディア・ミュージアム、テキサス大学ハリー・ランサム・センター等）において実物の調査すること、それらの作者に係る文献資料を調査すること、また同時に、ラファエル前派の画家、ジョン・エヴェレット・ミレイやダンテ・ガブリエル・ロセッティ、エドワード・バーン＝ジョーンズ、アーサー・ヒューズその他の画家の作品（テート・ギャラリー、レディ・リーパー・アート・ギャラリー、マンチェスター・アート・ギャラリー等）、そして美術評論家のジョン・ラスキンなどの絵画や収集した写真（ランカスター大学ラスキン・センター等）を実際に鑑賞して調査すること、及び文献調査により（大英図書館、V&A ライブラリー等）、英米ですでに進められている関連分野の研究の状況を把握し、それに基づいて自分独自の考察を加えることを目指す。

4. 研究成果

< 研究成果の内容 >

< 研究対象と目的 >

本研究では 19 世紀半ばに登場した写真術という新しいメディアが人々の意識にどのような影響を与えたのかという疑問に関して、1848 年に結成されたラファエル前派兄弟団の絵画との影響関係から探ろうとするもので、特に近年評価されている四人の写真家、O. G. レイランダー、ルイス・キャロル、ジュリア・マーガレット・キャメロン、レディ・クレメンティーナ・ヘイワードの写真作品やコレクションが、ラファエル前派の画家たち、特にジョン・エヴェレット・ミレイ、ダンテ・ゲブリエル・ロセッティ、ウィリアム・バーン＝ジョーンズ、さらに彫刻家のアレグザンダー・マンローやラファエル前派に共鳴する画家のアーサー・ヒューズなどの絵画作品や、あるいは画家たちからどのような影響を受けていたかという視点を中心に考察するものである。写真の描写能力によるリアリズムへの傾倒というラファエル前派の特徴がある一方で、発明されて間もない写真は芸術として認められるために、ラファエル前派の絵画の様式に近づこうとする動きがあるなど、お互いに意識し影響しあった経緯とその後の変化を、個別の写真家の作品や、作家同士の交流の影響などを検証することによって明らかにすることである。

< 調査方法等 >

本研究課題では、これに先行する科研の研究課題（平成 26 年度採択 JSP 科研費 26370285）において行った調査から継続し蓄積してきた調査内容を含めた調査資料を総合して使用している。それらをまとめると、テキサス大学オースティン校ハリー・ランサム・センター、プリンストン大学図書館、ニューヨーク大学図書館、オックスフォード大学クライストチャーチ図書館等に所蔵されているルイス・キャロルの写真および写真アルバム、またブラッドフォード・メディア・ミュージアムその他にある O. G. レイランダーの写真、ヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアム、ワイト島にあるディンボラ・ロッジ、アメリカのポール・ゲッティ・ミュージアム、その他の場所にある J. M. キャメロン、C. ヘイワードの写真の現地調査を実施することにより、それぞれの写真家の伝記的背景や作品の詳細を調査した。

これと並行して、ロンドンのナショナル・ギャラリー、ナショナル・ポートレート・ギャラリー、テート・ギャラリー、リバプールのレディ・リーパー・ギャラリー、その他の美術館にあるラファエル前派の画家たち、J. E. ミレイ、D. G. ロセッティ、W. ホールマン・ハント、アーサー・ヒューズなどの作品を調査し、さらに大英図書館やヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアム図書館での調査により上記の写真形と画家たちとの関係についての伝記的事実と当時の批評、先行研究文献などの文献調査を実施し、写真作品の画像分析から見られる影響関係を検討した。

< 成果としての論文と内容 >

写真家としてのルイス・キャロルについての研究はこの研究課題の出発点となっているため、キャロルと同時代で交友関係のあった写真家や画家を巡ってその影響関係を検討する形になっている。

論文：「ルイス・キャロルの写真アルバム A[X]について」『県立広島大学総合教育センター紀要』第 4 号（2019 年 2 月）pp. 29-41. では表記のアルバムの写真を詳細に調査し、写真リストを作成し、アルバムから読み取れるキャロルの交友関係や関心について議論した。検証の結果、キャロルがアマチュア写真家としての社会的認知を利用して、多くのラファエル前派の芸術家

と親交を持つに至ったこと、その結果として彼らの絵画の手法としてのナラティブの表現、聖書、神話、シェイクスピア劇、そしてテニソンなどの詩作品から題材を取りつつ、詳細な写実技法と鮮明な色彩を用いた表現で一時代を築いたことに、キャロルも大きな影響を受けていたことがわかった。資料としての写真アルバムというものの具体的調査はこれまでなかったので、アルバムに貼られた写真を詳細に調査し、その結果をこの論文でまとめることができたのは一つの成果である。同時にラファエル前派の絵画そのものにキャロルが自分で手書き原稿につけた挿絵が、ラファエル前派の絵画から直接的な影響を受けていることを指摘することができた。

論文「O. G. レイランダーとルイス・キャロル」*Mischmasch* (『ミッシュマッシュ』、日本ルイス・キャロル協会学会誌) 第22号、2020年、pp. 68-79. では、キャロルとナラティブ・フォトグラフの創始者とされるレイランダーの交友関係を中心におきながら、レイランダーのナラティブ・フォトグラフィが絵画から受けた影響と絵画に対して与えた影響について考察した。

論文：「写真の国のアリス：アイデンティティ・モンタージュ・ファンタジーの創造」、『ミッシュマッシュ (*Mischmasch: Journal of the Lewis Carroll Society of Japan*) 日本ルイス・キャロル協会学会誌、(2023年11月)、pp. 71-83. では、キャロルの写真趣味と彼の文学創作の間にも、重要な関係があることについて、これまでの知見をまとめ、総合的な考察を行った。写真という全く新しいメディアによってもたらされた当時の人々の自己認識における大きな変化が『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』という文学作品に与えた影響について考察した。写真の出現によって、人々が、他者として立ち現れた自己を見つめ直す必要に迫られたことにより、いわゆるアイデンティティ「自己同一性の認識」の意識が初めてもたらされたのであり、キャロルの『アリス』作品におけるアイデンティティの危機のエピソードは、文学の世界に大きな変革をもたらしたことを論証した。

ジュリア・マーガレット・キャメロンについての研究は、論文：「J. M. キャメロンの写真による A. テニソンの『国王牧歌』の視覚化について」、『県立広島大学地域創生学部紀要』第2号(2023年3月)、pp. 105-118. として発表した。この論文では、キャメロンの写真が、よりラファエル前派の絵画のような画面構成を持つ表現に近づき、さらに男性権力の神話としてのアーサー王物語を、女性的視点から捉え直すものであることを論証し、同時にキャメロンの写真の技法が、ラファエル前派の絵画におけるナラティブの描写の手法によって影響を受けつつ、逆にキャメロンの写真の技法が、ラファエル前派の絵画が第一期の段階から第二期に変質してゆく過程に影響を与えていることを論証した。

4. 「レディ・クレメンティーナ・ヘイワーデンの写真における鏡について」、『県立広島大学地域創生学部紀要』第3号(2024年3月)、pp. 151-163. では、レディ・クレメンティーナ・ヘイワーデンの写真が、他の写真家がラファエル前派の絵画から受けた影響、つまりナラティブ・フォトグラフとしての表現とは異なる特質を持っていることを論証した。ヴィクトリア朝期の女性、特に上流階級の妻と母としての役割により特殊な環境に置かれていた女性の内面の表現としての写真であることを論証し、それが写真の新しい芸術表現として、当時すでに評価されていたという事実を検証した。その作品の特徴についてジェンダーの観点から考察を加えた。写真というものが撮る主体としての男性、撮られる主体としての女性という関係性に傾いていた時代に、女性写真家としての視点が、新たな表現を提示している例として貴重であることがわかった。

<総括>

これらの個別の研究から結果として得られた総括的な議論としては、ラファエル前派の絵画の特徴としての、風景や事物の実物を観察しながらその真実を見極めて詳細に描くという描画法には、そもそも写真というメディアの登場の影響が大きいということである。ラファエル前派の画家たちの理想には、「自然に忠実に」を合言葉としたジョン・ラスキンによる美術理論の影響が大きい。しかしラスキン自身がダゲレオタイプ写真の美しさと描写力に魅せられたという経緯があった。しかしラスキンの写真に対する立場は複雑で、その科学技術としての描写能力を評価しつつも、あくまでも写真は補助的な役割を果たすのみであって、芸術家の本来の仕事は写真的な細密描写ではなく、神の創造物としての自然の美を愛することから発する真摯な手仕事の労働に関心があったのである。

そして、ラファエル前派の絵のテーマとしての聖書や神話、シェイクスピア演劇、そしてテニソンの詩、アーサー王伝説の場面の視覚化というテーマを、独特の細密描写と鮮明な色彩で描く描画法は写真の登場と深い関係にあることがわかった。一方では、初期において芸術として認められなかった写真の方に、ラファエル前派の絵画が逆に大きな影響を与えた。本来事実の記録であるはずの写真が、複数のネガによる合成といった技法を用いて、物語におけるフィクショナルなテーマでの作品を制作する、いわゆるナラティブ・フォトグラフ作品という流れを生んだ。その代表はO. G. レイランダーの「人生の分かれ道」、あるいはH. P. ロビンソンの「シャロットの姫」のような作品である。この流れの中でキャロルも同様な絵画的な写真を撮影していることが作品の分析から判明した。

キャロルの場合は、写真による表現方法の問題にとどまらず、新しいメディアとしての写真が人々の意識に与えた影響についても、自分の文学作品の中で表現していることが読み取れた。キャメロンの場合は、写真の描写力や写実性よりも、あえてブレや焦点のボケを用いた手法により絵画的な写真を指向し、テニソンの詩集『国王牧歌』の挿絵としての写真においては、叙事詩的な内容の物語の中で、抒情的な場面を、独特の絵画的な写真で表現することで男性的視点から女性的視点への転換を見せていることがわかった。C. ハイワーデンの場合は、絵画の影響を受けていた写真の流れから離れ、絵画を意識しない独自の精神性を表現しようとしていることがわかった。

ラファエル前派の活動はラスキンとミレイの決別、ミレイがグループから離反したことなどを機に作風を変化させてゆき、より象徴主義的な表現を思考する第二世代の活動へと移行してゆく。その中心はより官能性を求めた D.G. ロセッティだった。ロセッティはジュリア・マーガレット・キャメロンの写真における写実性とは異なる表現方法、意図的なブレの利用、焦点のずらしなどを使ったより絵画的な技法と相互に影響を与え合っていることがわかり、写真の側の変化が、彼の絵画の変質にも関係しているのではないかと推察できた。

また写真と絵画の本質的な違いが両者によって理解され、それぞれ別の表現形態として独自の方向性を模索して行く過程が、その後の両者の作品の傾向から見えてくるわけだが、その流れは19世紀後半から現代に至る我々の視覚的な現実認識だけではなく、文学的表現にも大きな影響を与えていることが見えてきた。

上記の各論文の内容を踏まえて、写真とラファエル前派絵画の影響関係についてのまとめとなる著書を現在執筆中である。

< 付記 >

2020年から約3年間に渡りコロナウイルス感染症に関わる渡航の制限などにより、資料調査を実行できなかったことを主な理由として、当初の研究期間を3年に渡り延長申請を行なったため、成果の方も最終的なまとめの執筆が遅れている。現在研究をまとめた単著（仮題：『写真と絵画のクロスロード：黎明期の写真術と英国ラファエル前派絵画』を出版すべく鋭意執筆に取り組んでいる。）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 吉本和弘	4. 巻 第2号
2. 論文標題 J. M. キャメロンの写真によるA. テニソンの『国王牧歌』の視覚化について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 県立広島大学地域創生学部紀要	6. 最初と最後の頁 105-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉本和弘	4. 巻 No. 22
2. 論文標題 O. G. レイランダーとルイス・キャロル	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Mischmasch: Journal of the Lewis Carroll Society of Japan	6. 最初と最後の頁 68-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉本和弘	4. 巻 No. 17
2. 論文標題 （書評） John Holmes, The Pre-Raphaelites and Science	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ヴィクトリア朝文化研究	6. 最初と最後の頁 195-199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉本和弘	4. 巻 第13号
2. 論文標題 ルイス・キャロルの写真アルバムA[III]とラファエル前派芸術	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 県立広島大学人間文化学部紀要	6. 最初と最後の頁 63-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉本和弘	4. 巻 第4号
2. 論文標題 ルイス・キャロルの写真アルバムA[X]について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 県立広島大学 総合教育センターセンター紀要	6. 最初と最後の頁 29-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉本和弘	4. 巻 第3号
2. 論文標題 レディ・クレメンティーナ・ハイワードンの写真における鏡について	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 県立広島大学地域創生学部紀要	6. 最初と最後の頁 151-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉本和弘	4. 巻 No. 25
2. 論文標題 写真の国のアリス: アイデンティティ・モンタージュ・ファンタジーの創造	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Mischmasch: Journal of the Lewis Carroll Society of Japan	6. 最初と最後の頁 71-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 吉本和弘
2. 発表標題 ヴィクトリア朝時代の写真術と児童文学
3. 学会等名 英語圏児童文学学会 西日本支部 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉本和弘
2. 発表標題 0. G.レイランダーとキャロル
3. 学会等名 日本ルイス・キャロル協会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉本和弘
2. 発表標題 ルイス・キャロルの写真アルバム A [X] について
3. 学会等名 日本ルイス・キャロル協会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Edward Wakeling著、楠本君恵、高屋一成、下笠徳次監訳（吉本和弘他、共訳）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 25
3. 書名 ルイス・キャロルの実像（翻訳書）原題 Lewis Carroll: The Man and His Circle	

〔産業財産権〕

〔その他〕

2020年から約3年間に渡りコロナウイルス感染症に関わる渡航の制限などにより、資料調査を実行できなかったことを主な理由として、当初の研究機関を3年に渡り延長申請を行なったため、成果の方も最終的なまとめの執筆が遅れている。現在、これまでの研究をまとめた単著（仮題：『写真と絵画のクロスロード：黎明期の写真術と英国ラファエル前派絵画』）を出版すべく鋭意執筆に取り組んでいる。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------